

同窓会

ニュース・レター

第8号

大阪大学
文学部
文学研究科
同窓会

2009年3月20日発行

大阪大学文学部創立60周年記念祝賀会・同窓会



大阪大学文学部創立60周年記念祝賀会・同窓会

創立60周年記念同窓会総会で交代となった新同窓会長・河上
誓作先生のご挨拶。なお、同窓会には100名の出席がありました。

文学部創立60周年記念講演会に集まってくださった聴衆
同窓会当日午前に行われた記念講演会では152名の方が
熱心に聴講されていました。

お悔やみ

2008年、私たちは二人の同僚を相次いで喪いました。まず文化表現論専攻／国文学・東洋文学
講座／比較文学専門分野の内藤高教授ですが、かねてご闘病中のところ、8月14日にお亡くなり
になりました。享年58歳でした。10月25日に先生を偲ぶ会が研究科の主催で行われました。また、文
化動態論専攻／文学環境論コースの米井力也教授ですが、かねてご闘病中のところ、10月26日
にお亡くなりになりました。享年53歳でした。2009年1月29日に先生を偲ぶ会が、文学研究科および言
語文化研究科言語社会専攻の主催で行われました。両先生のご冥福を心からお祈りするとともに、
研究・教育に対するそれぞれのお志を継承していくことを誓いたいと存じます。

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

いあいさつ

文学研究科長
江川 温

同窓会の皆様には、研究科長・文学部長としてご挨拶を申し上げます。まず昨年は文学部創立六〇周年に当たり、九月に千里阪急ホテルで記念行事をさせていただきました。講演会、同窓会総会、記念祝賀会には多くの会員がご集まり下さいました。また鷺田総長、理事、他部局の部局長、他大学の文学部長、企業人の方々にもご来賓いただき、大変盛大な会とすることができました。この時の同窓会総会では、長らく会長をお務めいただいた石原実氏が退任され、名誉教授の河上誓作先生が新たに会長に選出されました。

また、九月から同窓会会員を呼びかけ対象とする『大阪大学文学部・文学研究科「教育ゆめ基金」』を始めさせていただきます。これは、学生の研究活動の支援と教育における国際交流の推進のために、運営費交付金では支弁できないような費用を賄うべく、同窓会会員に寄附をお願いして研究科としての基金を作ろうとするものです。これにも短期間のうちに多数の会員諸兄からお志をお寄せいただきました。厚くお礼申し上げます。

大阪大学文学研究科・文学部は、これまでも日本の人文学の研究・教育を支える主要拠点であったわけですが、二〇〇七年の大阪大学と大阪外国語大学との統合に伴って、その規模は一段と拡大し、その使命はいっそう重くなりました。私も教員もそのことを深く自覚し、ますますの研鑽に励まねばなりません。同窓会会員諸兄のご理解とご支援を心からお願いする次第です。



江川 温
1979年京都大学大学院博士課程（西洋史学専攻）中退。大阪大学助手、同講師、助教授を経て1996年教授。2008年より大阪大学文学研究科長。

同窓会会長退任のご挨拶

同窓会前会長 石原 実

大阪大学文学部は、一九四八（昭和二十三）年九月十四日に文・法・経三学科、十五講座からなる旧制法文学部として開設され、翌年に五月に文学部と法経学部に分離し、かつ新制大学として再出発しました。一九五一（昭和二十六）年に（旧制）第一期生二十五名が卒業し、私も一期生の一人でした。そのときに、文学部同窓会が誕生し、最初の会長は近藤護君でしたが、その数年後私が会長の役目を引き次ぐことになりました。爾来、昨年まで五十五年という予想もしない長期間、微力ながら同窓会のために尽くして参りました。しかし、昨年九月に開催された文学部創立六十周年記念祝賀会と同窓会総会をもちまして、ようやく会長の任を解かれることになり、河上誓作新会長に引き継ぐことが出来ました。会長としましては、大変長期間にわたって、同窓会会員の皆さま、幹事、事務局の皆さまにご支援頂き、同窓会をこのように盛り立てて頂きましたことを深く感謝いたします。同窓会は、これからも新しい世代を受け入れ続け、次第に歴史の厚みをもつ組織に成長し続けることだろうと思います。文学部・文学研究科同窓会が、河上新会長のもとで、今後ともますます発展してゆくことを祈っております。



石原 実
1951年英文学講座卒業。文学部・文学研究科同窓会設立から2008年まで会長を務める。株式会社石原時計店取締役社長。

新会長就任のご挨拶

同窓会新会長 河上 誓作

この度、石原前会長のご指名により、同窓会会長の大役をお任せいたしました。本来ならば実業界の然るべき方に就任いただくのが本筋と思っておりましたが、残念ながらその状況が整わず、心ならずもお引き受けすることになりました。微力ですが、誠心誠意努力して参りますので、会員の皆様のご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

石原前会長には、昭和二十九年に第二代会長としてご就任いただいた以来、五十五年の長きにわたり同窓会の大黒柱としてご尽力いただきました。わが同窓会が今日まで着実な発展を遂げられましたのは、ひとえに石原前会長のご指導力のおかげです。甚大なご貢献に対し、心から御礼を申しあげますとともに、今後ともご助言を賜りますようお願い申し上げます。

ご存知の通り、大学を取り巻く状況はここ数年急激に変化しつつあり、これに呼応して、同窓会の活動もまた、新しい時代になさわしいあり方を模索する時代に入っているように思われます。十二月の幹事会では、新しい試みとして、①阪大文・文院の全領域の修論・卒論題目のニューズ・レター掲載（三月）と、②同窓生の新しい学問とのつながりの場を提供する試みとして第一回阪大文学部同窓会講座の実施（五月）を決定いたしました。特に②については、皆様のご参加を心からお待ち申し上げます。

人事面では、副会長として志水紀代子さんと柏木隆雄さんにご就任いただき、心強い陣容が整いました。幹事会全メンバーを含め、新体制へのご支援を改めてよろしく申し上げます。



河上 誓作
1967年大阪大学文学部助手、1968年九州大学助手、同講師、助教授を経て、1982年大阪大学助教授、1989年教授。2002年～2003年文学研究科長、2004年退官。神戸女子大学学長を務めた後、現在神戸女子大学文学部英語英米文学科教授。

退職なさる先生方から

同窓生へのメッセージ



◆我流の人生

日本史学教授 梅村 喬

長いようで随分早い阪大の一〇年でした。しばらく前、ある芥川賞作家の小説に「加齢は人生を加速する」という言葉を見つけ、「言い得て妙な」と共感を覚えたものです。

私の研究人生は、名古屋大学文学部に始まります。学部進学後に実証的学风で有名な高田弥永貞先生の謹厳な「日本三代実録演習」の洗礼を浴びたのが、この道に入るきっかけでした。ただ、当時はまだのんびりした時代で、確か国史講座三名の教員枠も適切な人材がいなかったため(と後日聞いた)弥永先生ひとりだけで、必然的に古代史を選択しました。偶然の事情でしたが、選択にあまり間違いはなかったように思います。ただ、卒論に際して先生は一〇ヶ月の海外研究に出られて不在、帰国後、大学院修士課程に入学した年、東大史料編纂所に転出されてしまい、後に近世史や中世史に新しい先生が着任されたものの、専門の特殊講義や史料演習を体験することは二度とありませんでした。つまり、私の専門授業は学部の二年にも満たず後は全く「我流」を通して今に至っています。



梅村 喬
1945年愛知県生まれ。日本古代財政、社会経済史を専門とする。古代から中世の過渡期に関心をもつ。著書に「日本古代財政組織の研究」(吉川弘文館)、「日本古代社会経済史論考」(塙書房)など。また高校教科書や大学教養教科書も執筆。

こんな事情から、誰れ憚ることなく自己流で勉強する自由を享受して、「我が道を行く」とばかりに本来の専門から離れて独り関心を追うことになりました。しかし本来、踏むべき学問の手順や厳格な史料批判の手づきにおいて後々まで遜色を感じ、投稿論文の初歩的ミスを指摘されて悩むこともしばしばでした。ただ、そんな環境がどんな分野にも物怖じせず、まず広く理解するという資質の形成に繋がったようなので、何が幸いするか分かりません。またその後、早川庄八というすばらしい研究者との出会いが私を鍛えてくれました。最近、「もしあの出会いやきっかけがなかったら」という感慨にふけることがよくあります。

阪大はとても居心地のよい大学で、着任当初に感じた「実物大で生きる人たち」という印象は今も変わりませんが、もう少し背伸びをしてもよいのではないかなという感想をもつことも時々あります。ともあれ、学生諸君の長い人生に僅かでも貢献できたことを念じるばかりです。

◆待兼山を去るにあたって

日本学教授 荻野 美穂

二〇〇〇年四月に大阪大学大学院文学研究科に着任してから九年が経ち、定年退職の日が近づきました。十年一昔にも足りない在任期間でしたが、毎年多くの新しい学生さんとの出会いに恵まれて、充実した時間を過ごすことができました。私のいた日本学はスタッフも学生も多士済々、留学生も多く、研究テーマは植民地支配の歴史や沖縄から在日問題、新宗教、はてはタカラヅカや「やおい」まで、すこぶるヴァラエティに富んでいて、最初はとまどうことも多々ありました。でも、ゼミや全体演習、さらには論文試問の度ごとに真剣勝負の議論でもまれ続けたおかげで、とかく自分の関心のある範囲に限られがちだった視野が大きく広がったのは、ありがたいことでした。教師を育てるのは学生だというのは、本当ですね。

その一方で、独法化や大阪外大との統合など、大学をめぐる状況の急激な変化に戸惑うことも少なくありませんでした。大学運営にも外の世界と同様、競争原理や業績主義が幅をきかせるようになるのは時代の流れかもしれないませんが、一人静かにマイペースで仕事をするのが好きな私のような人間には、しだいに生息しにくい世界に変容しつつあると感じました。そろそろ潮時、ということでしょうか(と言いつつ、四月からもしばらくは別の大学に所属する予定なのですが)。

待兼山を去るにあたって寂しいのは、一本の桜の木に会えなくなることです。保健センター近くの人目にふれにくいところにあつて、建物と外階段とのわずかな隙間にいかにも窮屈そうに生えているのですが、他の桜よりもずっと早い時期に満開になります。阪大に来てすぐ、通勤時に一緒にだった川北稔先生にこの木のことを教えていただいた以来、毎年、美しい花を楽しみにしてきました。ある年、近くの草むらにタヌキの親子とおぼしき一群を見かけたこともあります。

この木の近くの池は、近年、遊歩道として整備されました。その他にも阪大坂の改修や新しい文系総合棟の建設、さらには耐震補強工事と、この九年の間にも大学の様子はめまぐるしく変化しており、その勢いは当分続くのでしよう。でも、できることならあのひそやかな一角は変わることなく、静かなままで残ってほしいものです。



荻野 美穂
神戸女学院大学卒業。奈良女子大学大学院博士課程退学。人文科学博士(お茶の水女子大学)。奈良女子大学・京都文科大学を経て、2000年に文学研究科着任。専門は女性史・ジェンダー論。著書に、「生殖の政治学」[中絶論争とアメリカ社会]「ジェンダー化する身体」[「家族計画」への道]など。



◆ 出会い

日本語学教授 真田 信治

阪大に配置換えになった年の三月、国立国語研究所での送別会で、「新たな出会いを大切にしたい、云々」と述べたことを思い出す。一九八二年のことである。爾来、阪大での二十七年。さまざまな出会いがあった。いま、その折々を回顧している。

高校受験のため、故郷の五箇山から平野部に出る山峡を歩いていいたとき、大きな雪崩に遭遇した。十メートルくらい先、まさに目の前を轟音とともに雪崩が通過し、私はその突風で吹き飛ばされた。道路は跡形もなくなり、下を流れる川は雪と土砂で埋まってしまった。あと一分ほどの違いで命を落とすところであった。

人との出会いを、そしてその後の展開を思いめぐらし、感謝するたびに、このことを想起するのである。

子供の頃、近所の古老に、「いままで長く生きてきて、どんな思いなのか」と尋ねたことがある。その古老の答えは、「あつという間のことのように思われるが、一つ一つの出来事を思い浮かべると、いろいろあつて、長かったようにも思われる」といったものであった。いま、その気持ちがよく分かる。

阪大に着任した当初、日本ではじめての「社会言語学」講座に赴任するということで、か

りの気張りがあつたように記憶している。（日本で「社会言語学」という用語が誕生したのは一九七一年のこと、阪大「社会言語学」講座の設置は一九七七年であった。ただし、一九九五年の文学部の大講座制への移行に伴い、「社会言語学講座」は、「現代日本語学講座」「日本語教育学講座」と統合し、「日本語学講座」となった。その時点で「社会言語学」の看板は外されたのである。）

「社会言語学的研究」、私自身はあくまで言語変種としての「方言」を対象とする一つの研究方法として、それを採用・開拓したつもりである。自分の原点は、やはり *dialect*（何らかの基準によつて分かれる、それぞれのことは）を探究する「方言学」なのだ、と考える機会が最近増えてきた。



真田 信治
1970年 東北大学大学院修士課程修了。1990年 文学博士（大阪大学）。東北大学助手、国立国語研究所研究員などを経て、1993年 文学部教授。著書『地域言語の社会言語学的研究』（1990年 金田一京助記念賞）ほか。



◆ 去るにあつて

日本語学教授 土岐 哲

大阪大学に赴任して十九年、長いようで、あつという間の日々であった。赴任後間もない頃の教官研究会（当時）で「音声を観る」と題する研究内容の紹介をしたことを覚えているが、その頃は、自由に使える音響機材などはほとんどなく、重点領域研究の研究分担で導入した「音声録聞見」のみであった。その後、計画委員会等さまざまな方々の助けを借り、あらゆる機会を捉えては、音声研究に必要な種々の音響機器を購入し、学生にも自由に使用することができたのは幸いであつた。文学部の特殊機器購入の実績はあまりなく、当時の会計掛長さんには、申請書の書き方なども相談に乗っていただいたが、研究推進室などなかった頃のありがたい助力であつた。

音響機器には馬鹿正直なところがあつて、

必要なパラメータだけではなく、単に声帯などの生理的な動きによる不必要なパラメータまで感知してしまう。そこで、機器によるデータを読み込む場合には、十分な訓練が必要となる。そして、当該言語の話者が依存しているパラメータの特定に神経を使うことになるのだが、そのような視点がなければ、機器の性質に通じた理系の研究者にはかなわない。

文系の人間が機器を扱う場合には、自らの十分な音声学的能力・音韻論的整理能力に加えて、音声データの素性に精通した分析を心がけ、その強みを発揮する必要がある。今後、理系との共同研究も増えるであろうが、互いの長所をよく知つて補い合うことが大切となろう。



土岐 哲
早稲田大学文学部卒業、財団法人国際学友会専任講師、米加11大学連合日本研究センター専任講師、ミドルベリー大学客員講師、プリンストン大学客員講師、東海大学専任講師・助教授、名古屋大学助教授、大阪大学助教授・教授、広東外語外貿大学客員教授

文学部創立60周年記念講演会



講演者：光原 百合先生

文学部創立60周年を記念して講演会が開催された(二〇〇八年九月一三日(土)、一〇時三〇分—二時三〇分、於千里阪急ホテル)。講演者は、光原百合氏(作家・尾道大学准教授)と山崎正和氏(劇作家・大阪大学名誉教授)の二人である。

光原先生は、文学部・文学研究科の卒業生の代表として(昭和六十二年文学部英文学専攻卒業、平成八年博士後期課程英語学専攻修了)、「ミステリー小説の作り方——『十八の夏』をめぐる」と題して講演をされた。第五五回「日本推理作家協会賞(短篇部門)」「二〇〇二年」を受賞された自作『十八の夏』(双葉文庫)をめぐる、ミステリー作家が作品を作り出す舞台裏を、日本および世界の名作ミステリーを例

に挙げて分析しながら、ユーモアを交えて楽しく紹介して下さった。光原先生のミステリーには、一般に見られるような、おどろおどろしい殺人事件は起こらず、リリシズムの漂うメルヘン風の品の良い物語が特徴であるが、講演を拝聴した聴衆はその秘密が分かった気持ちになった。今後の一層のご活躍を期待し、同窓生も応援したい。

山崎正和氏は、文学部・文学研究科において教鞭をとられたかつての教授陣を代表して「職業としての学問」と題して講演をされた。山崎先生は、『世阿弥』『実朝出版』などの優れた劇作品を生み出された劇作家であるとともに、『やわらかい個人主義の誕生』『社交する人間』『装飾とデザイン』等の著作において、日本における現代という時代をリードされる注目の文化論・文明論を発表されてこられた批評家である。今回のご講演においても、学問の世界において加速的に進行する専門化という状況を鑑み、みずから学問を他の学問分野との関係において位置付けて確認しようとする意識の大切さを説かれるなど、文学部において研究に従事する者に大変示唆的なお話を下さった。熱の入った力強いお話ぶりに文学部の後輩たちは深い感銘を受け、今後も、先生からの常に変わらぬ啓発をいただくことを願った次第である。



大阪大学文学部創立60周年記念講演会

文学部、あらたな挑戦

2008年9月13日[土] 10:30-12:30

千里阪急ホテル 仙寿の間

地下鉄東淀川線千里中央駅、大阪メトロ千早中央線千早中央駅より5分

一般来聴歓迎 入場無料

お問合せ
大阪大学文学部研究科研究推進室
TEL.06(6850)5086 y-ohno@let.osaka-u.ac.jp 担当 西田
大阪大学文学部 文学研究科 / 大阪大学文学部 文学研究科同窓会 共催



講演者：山崎 正和先生

「文学部、あらたな挑戦」というテーマを掲げて開催した記念講演会は、参加された多くの聴衆に大きな感激を与え成功裏に終わった。

(玉井 暲)



同窓会副会長志水紀代子氏から石原 実元会長へ花束贈呈



新同窓会会長：河上 誓作氏



元同窓会会長：石原 実氏

文学部創立60周年 記念懇親会

二〇〇八年九月十三日(土)、文学部創立60周年記念同窓会総会と記念講演会・祝賀会が千里阪急ホテルで開催された。総会に先立って、この日の午前中、公開記念講演会が開催され、同窓生(昭和六十二年文学部卒)で気鋭のミステリー作家光原百合氏(演題「ミステリー小説の作り方―『十八の夏』をめぐって」と、名誉教授の山崎正和氏(「職業としての学問」)が講師をつとめられた。一般聴衆もまじえ会場は満席で、盛会であった。

午後から祝賀会に先立って開催された総会では、同窓会創設以来長くその任にあった石原実元会長が退任され、感謝を込めて花束の贈呈が行われた。後任を河上誓作副会長が引き継ぐことになり、文学部60年の歴史を踏まえて、新たな出発の決意を述べられた。会務報告が入江事務局長、会計報告が村田常任幹事から行なわれた後、和田常任幹事から「教育ゆめ基金」の主旨説明があり、同窓会として支援していきたいので同窓生のみなさんに協力をお願いしたいとの要請が行われた。

祝賀会は、鷺田清一総長、江川研究科長ほか来賓挨拶のあと、ミニコンサート(歌・溝淵悠理、ピアノ伴奏・次郎丸智希)、同窓生のスピーチ(藤田 實(英文)、澤井万七美(演劇学)、井口直子(仏文)、スライドショー)があり、天候にも恵まれて、盛会裏に幕を閉じた。

(同窓会副会長 志水紀代子)



鷺田 清一 大阪大学総長
(元文学研究科長)



大阪大学総長

スライドショー



ピアノ:次郎丸智希氏(音楽学・ドイツ文学)



アルト:溝淵 悠理氏(音楽学)

記念祝賀会の様子
ミニコンサート



澤井万七美氏(演劇学)



井口 直子氏(フランス文学)



藤田 實氏(英米文学)

同窓生スピーチ



◆ 東洋史学

阪大東洋史の誕生は、私が生まれた一九四八年の翌年である。私は三六歳で阪大に赴任し、昨年還暦を迎えたので、すでに四半世紀を阪大東洋史と共に歩んできたことになる。この間に本研究室は大きく様変わりした。

創立後約三〇年間は一講座であったので、教授は一人であった。初代が東西交渉史・東南アジア史の桑田六郎、二代目が秦漢史の守屋美都雄、三代目が内陸アジア史の山田信夫と、いずれも錚々たる顔ぶれである。そして一九七九年に念願の二講座化が実現した時点で、宋代史の斯波義信が助教授から昇格し、五年間だけ二人の教授が並び立った。しかし、新たに助教授は選任されず、二講座になったものの実態は一講座と同じであった。ただ二講座化以前から教養部に長く在籍した唐代史の布目潮風が兼任として院生の指導を補佐した。

一九八三年に山田教授が退任し、翌年私が助教授として赴任した時、斯波教授が東洋史講座の担当で私がアジア諸民族史講座を担当、そして教養部におられた明代史の谷口規矩雄助教授を含めて三名だけであった。それから数年間は嵐のような人事異動があり、明清史の濱島敦俊教授と片山剛助教授、そして私の三人が揃い、現在まで続く合同演習・図書インスペクション・基礎漢文ゼミ・三分野別英語ゼミなどの態勢が整



現在の教員（中国史2人、中央ユーラシア史2人、東南・海域アジア史1人）
後列左より：桃木 至朗、森安 孝夫、片山 剛
前列左より：荒川 正晴、青木 教

うのは、一九九〇年代に入ってからである。それと共に学生・院生の数も増加して研究室は活気づき、教養部との合体と大講座化によつて今や教員も教授四人、准教授一人、助教一人となり、外部評価でも高い評価をいただくまでに成長した。私としては真に隔世の感を禁じ得ない。

教員全員が文献史料と現地調査をこなすのも特徴であるが、世界的研究水準を維持しながら、積極的に世界史教育に取り組んでいる点は、日本随一と自負している。あとは卒業生の活躍に期待する次第である。

（森安 孝夫）

研究室今昔

◆ 英語学

現在の阪大英語学の歴史は、一九四八年に設立された大阪帝国大学法文学部の文学科英文学講座に遡る。当時、英文学と英語学という学問分野は別れていなかったが、一九六〇年に英文学第二講座が設立され、その三年後の一九六三年に英文学第二講座が英語学講座に改称された。その後一九九八年、一九九九年に、大学院機構の改革が行われ、大学院では「英語学」専門分野、学部では「英米文学・英語学」専修として再編成された。



英文科・かつての新生歓迎会の風景

この間、英語学講座は、毛利可信（名誉教授）・成田義光（名誉教授）・河上誓作（名誉教授）・大庭幸男（教授）・岡田禎之（准教授）という教授陣が続いた。さらに、二〇〇七年に大阪外国語大学と統合となり、同大学より加藤正治・神山孝夫両教授（共に兼任）が新たに加わった。なお、大庭幸男もこの統合に伴い兼任教授となつたが、教育指導の面では、統合前と同じ状況である。

教授陣の専門分野は、語用論、意味論、認知言語学、認知意味論、生成文法理論、機能文法、歴史言語学、比較言語学と多岐に渡る。学生は、これらの分野のみならず、関連性理論、主要部駆動句構造理論、語彙機能文法などの隣接する研究分野についても教育を受け、教官ともども切磋琢磨し研究に勤しんでいる。その成果は、各種学会で積極的に発表され、本研究室の学術誌 OUPPEL (Osaka University Papers of English Linguistics) にも掲載されている。



英語学研究室の歴代教授
(HLC (Handai Linguistic Circle) 総会にて)

英語学では、これまで学部生約三百三十名、大学院学生約九十名を輩出しており、大学院修了生の中から博士の学位（課程博士・論文博士）を十数名出している。現在、英語学は以前と比べて教授陣・学生ともに充実している。これまでの良き伝統を維持しつつ、更なる発展を祈る次第である。

（大庭 幸男）

文学部視覚史料の

アーカイブ化にご協力ください



演習風景 (何の演習?)



旧合同研究室 (整理棚はまだあります)



旧文学部玄関 (正確な場所は分かりません)

大阪大学文学部が、まず法文学部として設置されたのは一九四八年、新制大学の発足とともに文学部となったのは翌四九年のことです。それからちょうど六〇年、学部としてあらためてその歴史を振り返り、記憶や記録を未来につなげていくべき年齢を迎えたといえるでしょう。

歴史をかたるのは何より文献や文書ですが、写真もまた同じく重要です。ときには、文献以上に雄弁な史料となります。そうした点に着目して、日本史研究室の飯塚一幸准教授を中心とした共同研究チーム「デジタルアーカイブ化による大阪大学文学部視覚史料の基礎研究」が、昨年夏から活動を始めました。

これは、さしあたり創設から大阪万博が開かれた一九七〇年ごろまでの写真を収集し、それを電子データ化して蓄積、公開する事業です。建物や施設、授業や実習、研究室での勉強や行事、教員・学生のすがた、社会的な事件など、阪大文学部の研究と教育の日常をとらえた映像に重きをおいて収集します。その一端はすでに、昨年九月の文学部創設六〇周年記念同窓会にてスライドショーとしてご披露し、たいへん好評をいただきました。貴重な画像、懐かしい写真をお持ちの皆さま、それらを歴史をつたえる公共の史料として未来に残すため、お力添えいただければさいわいです。ご協力をいただける場合は、大阪大学総合学術博物館の廣川和花助教までお知らせください。

FAX 061685016720
メール: hirokawa@museum.osaka-u.ac.jp



建設中の附属図書館と文法経本館



石橋門風景 (背後にイ号館が見える)



発掘風景 (何の発掘?)

◆「教育ゆめ基金」が始まりました◆

昨年二〇〇八年文学部は創立六〇周年を迎えました。これを機会に文学部・文学研究科では教育活動を支援していただくために「教育ゆめ基金」を創設しました。この基金は人文学教育の国際化、学生の海外留学の支援、留學生の支援、優秀な学生への奨学金等、もっぱら優秀な人材を育成するための教育助成を目的としています。昨年度は同窓生をはじめとする文学部に縁のある方々から合計二百二十一万円のご寄付をいただきました。心よりお礼申し上げます。今後ともご支援いただきますようお願いいたします。

いつでも、お心のままにご寄附いただければ幸いです



平成20年度「教育ゆめ基金」寄附者リスト (敬称略)

赤木 順子	岡田 千賀	黒川 行信	白土 芳人	中村 加津	藤田 隆則
天野 文雄	沖田 知子	肥塚 隆	神保 菘	中村 元保	榎本 裕之
荒木 浩	奥 純	小林 正人	高橋 正	長山 泰孝	三宅 宣子
栗根 功雄	笠井 隆	斎藤芙美子	竹鼻 圭子	成田かおる	村田 路人
石原 実	笠松 容子	阪田 順子	田中 潤一	長谷川存古	山上義太郎
磯島 啓子	片山 剛	里見 軍之	玉井 暉	服部 典之	山口 恵照
井上 淳子	加藤 正治	真田 信治	寺門日出男	平岩 静	山田 玲子
今村 貴代	上山 泰	佐野満智子	土岐 哲	平尾 和子	山戸 照靖
上野 修	河上 誓作	澤井 昌子	中川 敬	福島 正彦	吉田 高重
江川 温	川口 能久	渋谷 勝己	中島 巖	藤井 順子	和田 章男
大野篤一郎	岸 彰則	志水紀代子	永田 靖	藤井友比呂	渡辺 義嗣

【第一回 大阪大学文学部同窓会講座のご案内】

同窓会活性化策の一つとして、新たに同窓生対象の「大阪大学文学部同窓会講座」を開くことになりました。今後、定期的に講演会や現地見学会などを行う予定です。第一回の講座は、以下のような内容です。

【テーマ】 「適塾とその周辺を訪ねる」

【講師】 村田 路人氏

(大阪大学大学院文学研究科教授、一九七七年卒)

【日時】 二〇〇九年五月九日(土)午後一時三〇分、

適塾(大阪市中央区北浜三―三―八、地下鉄御堂筋線または京

阪淀屋橋駅下車すぐ)西隣の緒方洪庵座像前に集合。

【備考】 適塾、除痘館跡、銅座跡(愛珠幼稚園)、懐徳堂跡を見学。

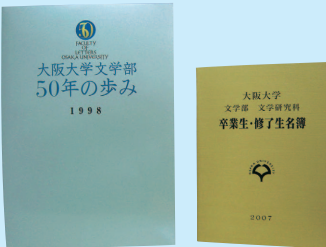
適塾では、緒方洪庵および適塾関係の古文書の解説もあ
ります。

事務局便り

●お知らせ

◆文学部創立五〇周年記念写真集『大阪大学文学部50年の歩み』、
『文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』(二〇〇七年版)販売中
一九九八年に大阪大学文学部創立五〇周年を記念し製作され
た『大阪大学文学部50年の歩み』の残部(二百冊程度)を卒業生・
修了生の皆様に限り、販売(二〇〇〇円)十送料(一六〇円)で販売
いたします。

また、二〇〇七年六月刊行の『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』のご購入も随時承っております。こちらは販売
(四〇〇〇円)十送料(一六〇円)でお送りいたします。ただし名簿



のご購入は同窓会会員の方に限定しておりますので、ご入会がお済みでない同窓生の方には
入会手続きをお願いしております。あらかじめご了承下さい。なお、同窓会終身会費(一〇〇
〇〇円)をお支払いいただいた方には一冊謹呈しております。振込用紙通信欄に名簿希望の
旨をお書き添え下さい。

写真集・名簿のご購入を希望される方は以下の郵便振替口座に所定の金額をお振込み下
さい。ご入金確認後、発送させていただきます。ご購入に際し、質問等ございましたら同窓会
事務局まで遠慮なくご連絡下さい。

【写真集、名簿、終身会費のお支払い】

口座番号 009401179043

加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

*お手数ですが、通信欄に①卒業・修了年、②専攻・専修名をご記入下さい。

●お願い

◆住所変更について

住所変更・勤務先変更等ございましたら、必
ず同窓会事務局までご一報下さい。名簿への住
所、電話番号等の記載拒否を希望される場合
は、その旨あわせてお知らせ下さい。皆様のご協
力をよろしくお願い申し上げます。

◆事務局メンバー

事務局長：入江 幸男(S五二)

総務：渋谷 勝巳(S六二)

企画・立案：和田 章男(S五五)

三谷 研爾(S五九)

本間 直樹(H七)

広報・服部 典之(S五六)

事務局補佐：馬淵 恵里(H十七)

●住所：〒500-0853 豊中市待兼山町一番五号

●ホームページアドレス：http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/

●事務局メールアドレス：dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

